

馬鈴薯と阿蘭陀

農研機構 種苗管理センター 所長

ふくしま まさと
福嶋 正人

昭和22年（1947年）に、農林省がばれいしょ増産を図るため健全な種ばれいしょの供給のために馬鈴薯原原種農場を開設してから、昨年（2017年）で70周年を迎えた。農場用用地として確保された原野や放牧地などを、資材不足のなか開墾し圃場の整備に取り組まれた先達の皆様の御苦勞に改めて敬意を表したい。「いも類振興情報」においては、「ばれいしょ原原種の生産農場」コーナーにおいて、各農場の近況などを読者の皆様にお伝えできる機会を与えて頂き、感謝の念に堪えないところである。

ばれいしょは、17世紀にオランダ人によって現在のジャカルタから長崎にもたらされたとされている。オランダと我が国は長い交流の歴史があるが、農業分野においてもオランダは狭い国土を有効に活用して、施設園芸による花き・野菜など高収益型の農業を展開していることから、オランダとの農業分野におけるイノベーションの推進などの協力を促進するため、農林水産省においては平成28年に「日・オランダ農業協対話」を創設し、様々な会合が開催されてきている。研究分野においては、農研機構が農業分野では世界トップクラスのワーヘニンゲン大学研究センターと平成27年に連携協定覚書を締結し、共同研究の実施などに取り組んで来ているが、一層の連携強化のために、新たに連絡研究員を平成30年春

に同センターに配置する計画である。

オランダは世界有数の種苗生産国でもあり、オランダ経済省が昨年公表した種苗に関するパンフレットをみると、世界の種ばれいしょ貿易の6割をオランダが占めており、検査機関による的確な検査がそれを支えているとしている。また民間企業において開発が取り組まれている“potato seed”についても紹介されている。これは塊茎ではなく種子でばれいしょを増殖するものであり、“True Potato Seeds（真性種子ジャガイモ：TPS）”と呼ばれている。オランダの民間企業の育成品種に対して、昨年4月にオランダで育成者権が認められ話題になったが、開発に携わった研究者は、本品種は特にアフリカなどの途上国において塊茎に比べて品質を劣化させることなく流通することが可能でありメリットが大きいと述べている。昨年、欧州委員会はTPSによるばれいしょ生産に関する試験を加盟国の参加の下2023年まで取り組み、評価を行うことを決定している。

種苗管理センターでは、昨年、オランダの栽培試験実施機関であるNaktuinbouwと栽培試験に関する連携協定を締結したところであり、今後種ばれいしょ検査機関であるNAKとも交流を深めていき、種苗管理センターの種ばれいしょ生産に貢献できればと考えているところである。